

藤沢周平

麦屋町昼下がり





文春文庫

麦屋町昼下がり

定価はカバーに
表示してあります

1992年3月10日 第1刷

著 者 藤 沢 周 平

発行者 豊 田 健 次

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

T E L 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-719226-8

文 春 文 庫

麦屋町昼下がり

藤 沢 周 平



文 藝 春 秋

もくじ

麦屋町昼下がり

七

三ノ丸広場下城どき

八

山姥橋夜五ツ

一五三

榎屋敷宵の春月

二三九

初出・オール讀物

麦屋町昼下がり 昭和六十二年六月号

三ノ丸広場下城どき 昭和六十二年十一月号

山姥橋夜五ツ 昭和六十三年七月号

榎屋敷宵の春月 昭和六十四年一月号

単行本 平成元年三月文藝春秋刊

麦屋町昼下がり

麦屋町昼下がり

一

草刈甚左衛門の屋敷を出ると、やわらかい月の光が片桐敬助をつつんだ。来るときには気づかなかったから、月は多分草刈家にいる間にのぼったに違いない。

振りむいてたしかめると、辰巳たつみの空にやや赤味を帯びた月がうかんでるのが見えた。満月に近い月は、まだ寒かったひと月前には人にも物にももっと荒涼とした光を投げかけていたのだが、いまはためらうような光を地上に落としているだけだった。季節が移ったのである。

そのために月が形づくる物と影の境界はぼんやりと入りみだれて、道のところどころにある家や大きな木立の影は、行手に立ちはだかる物の怪けのようにも見える。道にはほかに歩いている者の姿は一人を見えず、そして夜気は深夜にもかかわらずかすかに潤んでいた。

——おそくなつたな。

母がさぞ心配しているだろうと、敬助は思った。もっとも甚左衛門の呼び出しもおそ

く、敬助の家に使いが来たのは五ツ（午後八時）をよほど回ったころだったろう。草刈甚左衛門は御蔵奉行で、敬助の上司である。

なにか、お城で粗相があったのではないかと、戸口まで送って出た母が言った。敬助の母は小心な女で、わずかなことをひどく気に病むたちである。夜も更けてからの上司の呼び出しをさっそく気にしたことはあきらかだったが、事實は母親の心配とは逆に、甚左衛門が用意していた話は敬助の縁談だった。片桐の家にとっては吉報に類することだったのである。

ただし縁談の相手には少少問題があった。甚左衛門が挙げた相手は寺崎吉兵衛の三女満江。身分がちがい過ぎた。寺崎吉兵衛は家禄百二十石で御書院目付を勤めているのに、対し、片桐敬助は三十五石取りの御蔵役人にすぎない。とても身分が釣り合いませんと、敬助はその場でことわった。

だが甚左衛門は、敬助がそう言うことをあらかじめ予想していたらしく、ことわりを聞いても少しも動じなかった。

「気持はわかるが、身分のことは気にせんでくれと吉兵衛が言っておる。要は人物だと申した」

甚左衛門は、敬助に微笑をむけた。

「つまり、ナニだ。吉兵衛はそなたの不伝流を高く買っているのだ。去年の秋の試合も

ちゃんと見ていて、娘をぜひああいふ男の嫁にと思っていたと申す」

「……………」

「だから、わしが片桐の嫁をさがしていると言いつ出したところ、むこうから身を乗り出して話に乗って来てこちらがびっくりしたほどだ」

秋の試合というのは、藩主が在国する年の菊の節句に、家中からえられた剣士五人が、二ノ丸の試合場に藩主をむかえて総あたりの試合をごらんに入れる、古くからのしきたりを指している。去年の試合で、敬助は無敗の成績をおさめた。

甚左衛門はそのことを言っているのだが、去年の試合には、これまで敬助が一度も勝っていない弓削新次郎がいなかったのである。面はゆい気分、敬助はそのことを口にした。

「しかし去年は、弓削どのが江戸詰に変わって姿を見せず、そのためにそれがしが勝ちを拾ったにすぎません」

「そんなことは吉兵衛だってわかっておるのではないか」

甚左衛門は、敬助が指摘したことにはさほど興味を示さず、無造作な口調でそう言った。

「寺崎でも、べつに藩中随一の遣い手をもとめているわけではなからう。一、二を争う、それで十分だろうて」

甚左衛門はつづいて、縁談の相手の満江という娘のことをしきりにほめそやし、また現職の中老河村権四郎の血縁につながる寺崎と縁を結ぶことは、片桐の家にとって行末わるかろうはずはないぞと、ごく功利的な意見もつけ加えた。

最後に甚左衛門は、そなたの母親は気の小さい女子だからこの縁談にはおどろくにちがいない、気長に説得してみろと家の中まで見透したようなことを言って、ようやく敬助を解放したのだった。

——さすがに……。

お頭はよくご存じだと、敬助は甚左衛門の言葉を思い出して苦笑を誘われている。

敬助の母ははやく夫に死別し、敬助と妹の二人の子供を抱えて、小心翼翼と片桐の家を守って来た女だった。三年前に敬助が亡父の跡を襲って、御蔵役人に召し出されてからはさすがに熄やんだが、その以前の母はなにかといえば上司である草刈家に駆けこんでは埒らちもない訴えごとをし、甚左衛門とその妻をひとかたならず悩ませていたのである。そういう母なので、寺崎家との縁談というものも、喜ぶよりさきに身分違いを思って動どう顛てんし、しりごみするのは間違いあるまいと敬助はみている。

そして身分違いの縁談は、なにも母親を持ち出すまでもなく、また草刈甚左衛門の説得にもかかわらず、敬助の心にもはつきりとうとうしい影を落としていた。むろん母にも一応は話してみるつもりだが、この縁談は……。

——とても、まとまるまい。

と、敬助は半ばあきらめていた。かりに寺崎の娘を嫁にもらったとすると、何かで親族が寄りあつまるなどというときには、多分百石以上の歴歴の中にただ一人三十五石の御蔵役人が立ちまじるということになるだろう。これは考えるだけで気分が滅入る。

しかしそう思う一方で、敬助はさっきから気持がかすかに上ずるのを感じていた。落ちつきなく上ずるだけでなく、その気持の底のあたりには、気をゆるめればすぐにも外にはじけて出そうな喜びが隠れているようでもある。敬助に嫁をもらわなければ、と母が言い出してからはじめての縁談だった。敬助の気持を浮き立たせているのは、縁談が持つはなやぎというものかも知れなかった。

満江というのはどんな娘か、と思ってみる。甚左衛門は、色白で気性は活発なほうだと言ったが、その言葉は満江という娘を理解するのに、ほとんど何の役にも立っていないのを感じる。寺崎家の三女満江は、神秘的なほのぐらい光につつまれて、黙って立っている。その人は、先先の話の行方はともあれ、敬助の人生にはじめてかかわり合った女性だった。

敬助はため息を洩らした。落ちつきなく上ずる気分と、なぜともなくやるせないような気分が、かわるがわる身体をつつんで来る感覚をもてあましていた。それも、いくらかはぼんやりと潤む月の光のせいだったかも知れない。

不意に前方に人が争うような声を聞いて、敬助は顔を上げた。すると、この深夜の道を人が走って来るのが見えた。人は二人で、前を走るのは女で後から追って来るのは男である。男は手に光る物を握っていた。拔身の刀を持っている、と見て敬助は反射的に刀の鯉口を切った。そして自分も前に走った。

「お助けくださいまし」

と女が叫んだ。女の眼が吊上がっている。まだ若い女だった。

走り寄って来た女をとっさに背にかばうと、敬助は追って来る男の前に立ちふさがった。追って来たのは半白の髪をした男である。白い寝巻を着ていた。しかし髪こそ白髪がまじるものの、首は太く手足には夜目にも鍛えた筋肉が見える大柄の男だった。

「じゃまするな」

駆け寄りながら、男は怒号した。そして理不尽にもいきなり斬りかかって来た。とめる間もわけもただす間もなく、敬助は無言で刀を抜き合わせると斬りむすんだ。

刀をはね返されると、男は怒りの声をあげた。だが意外に敏捷に体勢を立て直すと、ふたたび踏みこんで来た。その太刀さばきが鋭くて、敬助はその刀を受けることもかわすことも出来ないのを感じた。腰を据えて前に踏みこむと、男を斬った。

かわせば、おそらくうしろの女が斬られただろう。そして受ければ敬助自身が手傷を負ったにちがいない。それほどに、男の太刀は鋭く勢いはげしかったのである。そのこ

とをきとったとき、敬助の身体にひそむ剣士の本能が齒をむき出したようだった。

男は不自然に身をよじり、敬助に顔をむけたまましばらく立っていた。しかし突然にぎっていた刀を落とすと、つぎに木が倒れるように仰向けにどきりと倒れた。

その物音が、敬助を現実に取り引きもどした。驚愕して男のそばに駆け寄った。男を抱き起こして声をかけた。

「もし、いかがされた。しっかりなされい」

身体をゆすったが、男はひとことも口をきかなかった。不意に身体を顫ふるわせて大量の血を吐くと、そのまま動かなくなった。

敬助の一撃は、男の右腋の下から入って肋骨を断ち、肩の下まで斬り割っている。致命傷だった。それは斬ったときにわかっていたようでもある。敬助は抱き上げた男の身体を、そっと地面におろした。そして、立ち上がって女を見た。

女は土塀の陰からこちらを見ていた。敬助が立ち上がっても、無言で立っていた。

「この方は？」

敬助が聞くと、女が低い声で答えた。父です、と言ったように聞こえた。

「父？」

「舅しゅうとです」

「ははあ。で、このお方のお名前は？」